

UISS は ITSS のユーザ企業版？

コンサルティング部 部長
井上 実

経済産業省より 6 月 23 日にリリースされた情報システムユーザスキル標準 (UISS : Users' Information Systems Skill Standards) Ver1.0 は、ITSS が IT サービス会社向け標準人材像だったのに対し、ユーザ企業の情報システム部門向けの標準人材像を表わすものという認識が一般的だ。

はたして、そうなのだろうか？ UISS 策定の目的、内容を確認し、現時点で UISS をどのように活用すべきかを検討してみることにする。

1 . UISS 策定の目的

UISS の目的として、「企業自ら有する IS 機能の全体像の可視化を実現する」とこと、「IS 活用部門を含む IS に携わる人材の最適配置及び育成が実現すること」の二つが挙げられている。

後者は、ITSS と同様に人材育成が目的だが、前者は明らかに違う。また、人材育成面でも情報システム部門のような専任部門だけではなく、情報システムを活用する部門もその範囲に含まれており、広い範囲をカバーしている。

単に、ITSS のユーザ企業版が UISS という見方は UISS の一面しか捉えておらず、誤った認識であり、誤った活用をする可能性があるので十分に注意する必要がある。

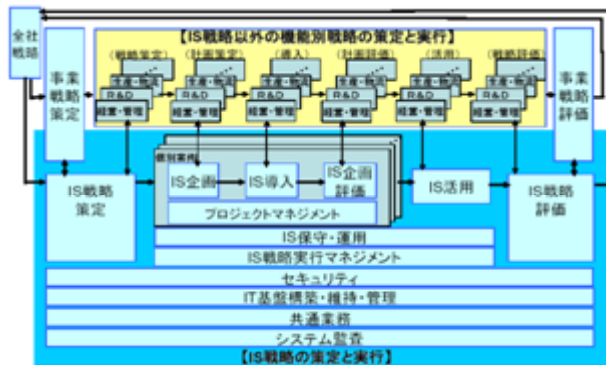
2 . UISS Ver1.0 の構成要素

UISS Ver1.0 とはどのようなものか、その 6 つの構成要素を見ることにする。

(1) タスクフレームワーク (図表 1 参照)

企業における情報システム機能を経営的観点から体系的に整理したもの。情報システムの企業内事業活動における位置付けを俯瞰できる。

(図表 1) タスクフレームワーク



出典：経済産業省「情報システムユーザスキル標準 Ver1.0」, 2006年6月2日, pp11

(2) タスク概要

タスクフレームワークで示された各タスクの概要(目的と主な機能)を示したもの。

(3) 機能・役割定義(図表2参照)

タスク概要で示されたタスク内容をさらに詳細にブレイクダウンし、それらの機能を実現するために必要な専門スキル、知識の対応付けを一覧化したもの。

(図表2) 機能・役割定義(IS戦略策定)

| 業務 | | | スキル | 知識項目 |
|------|-------------------|---|--|--|
| 大項目 | 中項目 | 小項目 | | |
| | | 組織方針策定の策定 | ITシステム企画・戦略の策定・実施、各機能を目的別に必要となる作業を洗い出すことができる 洗い出した各作業の内容を整理して、WBS/ロードマップの観点で、どのようなスキルが必要となるかを洗い出すことができる 洗い出したロードマップの優先順位を明らかにし、実行に向けた調整業務を実施することができる | IT戦略策定 |
| 戦略策定 | IT戦略策定プロセスおよび環境分析 | IT戦略策定プロセスの分析 | IT戦略策定プロセスのロードマップでIT戦略の全体像を基にロードマップでスキルを洗い出すことができる | IT戦略策定プロセスの分析・実施 IT戦略策定 |
| | | IT戦略策定プロセスの調査・分析 | IT戦略策定プロセスの調査・分析 業務上の課題を分析・抽出し、文書化できる 業務内における管理業務の課題を分析し、文書化できる | IT戦略策定プロセスの調査・分析 業務上の課題の調査・分析 業務上の課題の調査・分析 業務上の課題の調査・分析 業務上の課題の調査・分析 |
| | | IT戦略策定プロセスの調査・分析 | IT戦略策定プロセスの調査・分析 業務上の課題を分析・抽出し、文書化できる 業務内における管理業務の課題を分析し、文書化できる | IT戦略策定プロセスの調査・分析 業務上の課題の調査・分析 業務上の課題の調査・分析 業務上の課題の調査・分析 |
| | | IT戦略策定プロセスの調査・分析 | IT戦略策定プロセスの調査・分析 業務上の課題を分析・抽出し、文書化できる 業務内における管理業務の課題を分析し、文書化できる | IT戦略策定プロセスの調査・分析 業務上の課題の調査・分析 業務上の課題の調査・分析 業務上の課題の調査・分析 |
| 戦略策定 | IT戦略策定プロセスの調査・分析 | IT戦略策定プロセスの調査・分析 業務上の課題を分析・抽出し、文書化できる 業務内における管理業務の課題を分析し、文書化できる | IT戦略策定プロセスの調査・分析 業務上の課題の調査・分析 業務上の課題の調査・分析 業務上の課題の調査・分析 | |

出典: 経済産業省, 「UISSの機能・役割定義」, 2006年6月23日, pp3

(4) 人材像とタスクの関連(図表3参照)

タスクを担う人材像を想定し、各人材像がどのタスクを担うかを示したもの。この図に示されている人材像は10種類であるが、すべてのタスクの基礎をなしているタスクに関わる人材像であるセキュリティアドミニストレータ、IS オーディタ、IS スタッフがこれら以外にある。

(図表3) 人材像とタスクの関連

| タスク | IT戦略策定 | IT戦略策定プロセスの調査・分析 | IT戦略策定プロセスの策定 | IT戦略策定プロセスの実施 | IT戦略策定プロセスの評価 | IT戦略策定プロセスの改善 | IT戦略策定プロセスの廃止 | IT戦略策定プロセスの移行 | IT戦略策定プロセスの統合 | IT戦略策定プロセスの連携 | IT戦略策定プロセスの共有 | IT戦略策定プロセスの公開 | IT戦略策定プロセスの活用 | IT戦略策定プロセスの普及 | IT戦略策定プロセスの定着 |
|------------------|--------|------------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 事業戦略策定 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 |
| IS戦略策定 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 |
| IS戦略策定プロセスの調査・分析 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 |
| IS戦略策定プロセスの策定 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 |
| IS戦略策定プロセスの実施 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 |
| IS戦略策定プロセスの評価 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 |
| IS戦略策定プロセスの改善 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 |
| IS戦略策定プロセスの廃止 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 |
| IS戦略策定プロセスの移行 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 |
| IS戦略策定プロセスの統合 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 |
| IS戦略策定プロセスの連携 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 |
| IS戦略策定プロセスの共有 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 |
| IS戦略策定プロセスの公開 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 |
| IS戦略策定プロセスの活用 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 |
| IS戦略策定プロセスの普及 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 |
| IS戦略策定プロセスの定着 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 | 主たる領域 |

出典: 経済産業省, 「情報システムユーザーズスキル標準 Ver1.0」, 2006年6月23日, pp18

(5) 人材像定義

13 種類の人材像のミッションと活動内容と存在するレベル範囲を定義したもの。レベルはITSSと同様な考え方で大きくはエントリーレベル、ミドルレベル、ハイレベルの3段階、さらに詳細化した7レベルが設定されている。

(6) キャリアフレームワーク(図表4参照)

人材像ごとに存在するレベルを定義し、一つの図にまとめたもの。

(図表4) キャリアフレームワーク

| 人材像 | レベル | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------|-----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ビジネスストラテジスト | | | | | | | | | | | | | | |
| ISストラテジスト | | | | | | | | | | | | | | |
| プログラムマネージャ | | | | | | | | | | | | | | |
| プロジェクトマネージャ | | | | | | | | | | | | | | |
| ISアナリスト | | | | | | | | | | | | | | |
| アプリケーションデザイナー | | | | | | | | | | | | | | |
| システムデザイナー | | | | | | | | | | | | | | |
| ISオペレーション | | | | | | | | | | | | | | |
| ISアドミニストレータ | | | | | | | | | | | | | | |
| ISアーキテクト | | | | | | | | | | | | | | |
| セキュリティアドミニストレータ | | | | | | | | | | | | | | |
| ISスタッフ | | | | | | | | | | | | | | |
| ISオペレーター | | | | | | | | | | | | | | |

出典: 経済産業省、「情報システムユーザースキル標準Ver1.0」, 2006年6月23日, pp23

3. UISS Ver1.0 と ITSSV2 との比較

UISS Ver1.0と2006年4月に経済産業省からリリースされたITSSV2の構成要素を比較する(図表5参照)と、UISSにはITSSには存在しないタスクフレームワーク、タスク概要、機能・役割定義がある。これらは、UISS策定の目的の一つである「IS機能の体系的な一覧を提供することで、企業自ら有するIS機能の全体像の可視化を実現する」ために作られてものであり、ITSSはこの目的を持っていないため、これらは存在しない。

UISSのキャリアフレームワークはITSSのキャリアフレームワークに、人材像定義は職種の詳細に該当する。また、人材像とタスクの関連はITSSキャリア編の中に掲載されている「IT投資局面と職種」が対応する。UISSの二つ目の目的が人材育成にあることから、ITSSと同様な構成を取っている。

しかし、現在のUISSでは、ITSSに存在する達成度指標、スキルディクショナリ、スキル項目・知識項目、スキル領域、スキル熟達度、研修ロードマップに該当するものがない。これは、UISSでは各人材像の各レベルを表わす指標がまだ定義されていないことを示して

いる。

人材育成という目的を達成するためには、人材像別レベル別に人材を把握し、個人別に適切な人材育成計画を立案し、実施、評価するマネジメントサイクルを回す必要がある。人材像別に各レベルを表わす指標がないと、人材像別レベル別に把握することはできないため、現状の UISS では人材育成に活用できない。ITSS を活用すべきである。

(図表5) UISSとITSSV2の構成比較

| 目的 | UISS | ITSSV2 |
|--------------------------------|-------------|-------------|
| IS機能の可視化を実現するためのもの | タスクフレームワーク | |
| | タスク概要 | |
| | 機能・役割定義 | |
| 人材像の概要 | 人材像定義 | 職種の概要 |
| | 人材像とタスクの関連 | IT投資局面と職種 |
| | キャリアフレームワーク | キャリアフレームワーク |
| 人材像別レベル別に人材を把握し、人材育成を実現するためのもの | | 達成度指標 |
| | | スキルディクショナリ |
| | | スキル項目・知識項目 |
| | | スキル領域 |
| | | スキル熟達度 |
| | | 研修ロードマップ |

4. いま、UISS をどのように活用すべきか

現状では、UISS の第一の目的である「IS 機能の全体像の可視化」に使用することが考えられる。具体的には、どのように活用すればよいのだろうか？

(1) タスクフレームワークを活用して企業内における情報システムの位置付けを明確化する。

情報システムの位置づけは現場業務の省力化・効率化から、事業戦略に直接関わるような戦略性の高いものに変化してきている。自社における情報システムの位置づけを見直し、明確にしないと担うべき機能・役割を見誤る可能性が高まる。

情報システムの位置付けの見直しを、タスクフレームワークを一つの見本、テンプレートとすることで効率的に行うことが可能となる。

タスクフレームワークで表されているような事業戦略から IS 戦略、IS 戦略から個別案件の IS 企画・IS 導入・IS 企画評価、そして IS 活用、IS 戦略評価という流れに自社がなっているかどうか、事業戦略を受けての IS 戦略策定などなく、個別案件の承認を得る目的だけの IS 企画、IS 導入に終始していないかどうか、あるいは IS 保守・運用だけに忙殺されていないかどうかなど。

そのうえで、あらためて、自社の事業活動における情報システムの位置づけは、どうあるべきかを検討し定義する。

(2) 情報システムに関する業務機能を、機能・役割定義を活用して定義する

タスクフレームワークを活用して、自社における情報システムの位置づけを定義したら、情報システムに関する業務機能とは、どのようなものかを機能・役割定義を活用して効率的に定義することができる。

一般的に、機能・役割を定義するにはファンクション分析が必要となる。機能・役割の見落としを避け網羅性を向上させるために、トップダウンで階層的に分析を行う。分析には、ファンクションツリーや DMM (Diamond Mandala Matrix) などが活用される。しかし、ファンクション分析は、多くの労力を必要とするものであり、一般企業ではなかなか実施しにくい。

UISS の機能・役割定義の中の業務の大項目・中項目・小項目 (図表 2 参照) は、タスクフレームワークに基づき、ファンクション分析した結果と見ることができる。

これを活用し、タスクフレームワークで定義した自社の情報システムの位置づけに基づき、機能・役割定義をテンプレートとして業務機能を定義することで、容易に効率的にファンクション分析を行うことができる。

具体的には、UISS の機能・役割定義の中から、自社の情報システムの位置づけで定義した部分のみを業務の大項目から抽出する。そして、中項目、小項目の内容を確認し、自社の情報システムに関する業務機能として、ふさわしいかどうかを検討し定義していく。自社にふさわしくない部分は削除し、不足する部分があれば追加する。

ここで定義した機能・役割が、自社の情報システムに関する全業務機能となる。

5 . UISS Ver2 への期待

来年度には UISS Ver2 のリリースが予定されている。UISS の第 2 の目的である人材育成に不可欠な人材像ごとのレベルを表わす指標や、ワンランクアップするために受講すべき研修を体系化した研修ロードマップなどが発表される予定である。

しかし、UISS を活用するユーザ企業の情報システム部門と、ITSS を活用する IT サービス会社は補完関係にある以上、ダブル・スタンダードができることは普及・運用を困難にする。ぜひとも、UISS と ITSS との整合性を取った標準人材体系を構築してもらいたい。